

序

本号は、2023年度におけるセカイトのメンバーおよび協力研究者による諸論文を掲載しました。

最初に掲げたのは、2023年9月30日に下仁田町文化ホールで開催された第4回セカイト公開講演会の記録です。講演会のテーマは「天恵の霊地 荒船風穴～その機能と役割」であり、世界遺産「富岡製糸場と絹産業遺産群」を構成する4遺産のひとつである荒船風穴をめぐる研究発表が行われました。基調報告を担当した世界遺産研究員の中島秀規氏は、日本における養蚕業が春繭だけでなく夏秋繭の生産を増加させ、イタリアのように不足繭を外国から輸入せずに済んだのは、風穴による蚕種の冷蔵保存が盛んに行なわれたためであったという問題提起を行いました。それを受けた福山市立大学教授の澤田結基氏は、地球環境科学の立場から、風穴には洞穴地形にできるタイプと崖錐地形にできるタイプがあるとして、そのメカニズムと利用法を説明し、風穴は日本だけでなくヨーロッパや韓国にもあることを紹介されました。続いて下仁田町歴史館の館長の秋池武氏は、荒船風穴を設立・経営した庭屋静太郎・千壽親子は、長野県にやや遅れながらも、東京の専門家から最新の技術を摂取し日本最大規模の冷蔵設備を構築しただけでなく、その後も荒船風穴という地元の条件を活かした各種の技術革新を積み重ねた点が注目されるという報告を行いました。

以下の6本の研究論文は、中島秀規、今井洋平、春山秀幸3研究員によるものと、松浦利隆、田中修、石井寛治という協力研究者によるものです。

研究員による論文はそれぞれ分担した産業遺産に関連する研究で、本『紀要』第2号、第3号に掲載されたものの延長上にあるものです。中島秀規「世界遺産・荒船風穴の価値に見る日本の風穴」は、風穴による蚕種冷蔵が世界各地でどの程度みられたかを、日本語文献を中心に可能な限り跡付けたものです。中国蚕糸業での風穴による蚕種冷蔵は日本人による調査には全く触れられておらず、ヨーロッパ蚕糸業ではアルプス山中に一部事例があるだけなので、風穴を利用した養蚕の多数回化は日本独自の特徴だというのが結論です。今井洋平「中国への養蚕・製糸技術の移転」は、第3号の研究ノートを踏まえつつ、日本国内で開発された一代交雑蚕種と多条繰糸機の中国への技術移転が1930年代に如何に行われたかを究明したものです。一代交雑蚕種という技術革新は外山亀太郎氏が論文で公開していますので、留学生や派遣教師を通じて製造技術が移転されたことが強調されています。問題は特許権がからむ多条繰糸機で中国が何らかのルートで輸入した上で盛んに複製した事実が明らかにされています。春山秀幸「田島弥平（4代目）の蚕種製造」は、清涼育で有名な田島弥平家が、蚕種輸出が終ってから国内向けの蚕種製造では県内トップの地位を占めている事実を同家の経営文書で丹念に明らかにしたもので、分場組織を採用するのはかなり遅いことが実証されています。

専門研究者の執筆論文の第一は、松浦利隆「日本生糸の行方—アメリカでどう取り扱われたのか—」で、日本生糸が太平洋航路・大陸横断鉄道によって迅速にアメリカ東部に輸送されるシステムが発達する半面で、撚糸工程・製織工程を経て最終製品となるために日本製糸家は消費実態を知らないという限界があることが問題とされます。第二の田中修「原富岡製

糸所から組合製糸群馬社への技術移転」は、原富岡製糸所長大久保佐一が、県庁からの依頼で組合製糸群馬社の社長を兼務し、富岡製糸所の高効率の経営方式を導入するが、組合員と対立して挫折する経緯を分析します。第三の石井寛治「富岡製糸場と工場法」は、1911年に制定された工場法に対して普通糸製糸家が猛反対したが、富岡製糸場に代表される優等糸製糸家が賛成の態度を取ったこと、開明的な官僚が妥協を繰り返しつつ制定に持ち込んだ経過を分析します。

以上が、セカイトの研究活動の報告としての本『紀要』第4号の内容であります。今号の発行を済ませた機会にセカイトの研究メンバーの多くが交代し、私も名誉顧問の職を辞することになります。これまでの活動に協力して頂いた関係諸氏に対して厚くお礼申し上げますとともに、今後のセカイトの活動に対して変わらぬ御支援をお願い申し上げます。

石 井 寛 治

(セカイト名誉顧問、東京大学名誉教授)